



# Annual Report 2010

## 秩父百年の森通信

2011年7月10日  
第2号

発行：  
特定非営利活動法人秩父百年の森



イタヤカエデ開花(4.17撮影)

目次	1 巻頭 新たな歩みのために	……1
	2 東日本大震災復興支援活動緊急報告	……2
	3 環境教育支援の取り組み	……4
	(1) 夏休み親子森林教室	……4
	(2) 空気をすって ほら おいしいでしょ(ふたば幼稚園の森づくり)	……6
	(3) Believe、チェンパロと歌う(第2回「森を語ろう」)	……8
	4 木をめぐる旅ガイド「秩父独り木」	……14
	5 2010年度活動報告と2011年度活動計画	……15
	6 秩父フォトアルバム	……16

## 新たな歩みのために

NPO 法人秩父百年の森 理事長 島崎武重郎

会員の皆様へ通信第2号をお送りいたします。昨年度は、8月17日にNPO法人として承認を得てから3月まで様々な活動に取り組み、皆様のご支援により確かな歩み記すことができました。NPO法人2年目にあたる本年度は、組織の充実を目指して、情報の交換と共有をさらに深めていきたいと考えております。

昨年度は、秩父市大滝地区を対象に認定された平成22年度過疎地域等自立活性化推進交付金事業(総務省)「第3のはちみつ」の開発と普及による花と蜜のあふれる地域活性化推進事業」に対して、全面的な支援活動を行いました。行政や大学、林業や養蜂業にたずさわの方々と様々に連携することができました。この経験は、私たちの会にとってこれからの活動の確かな基礎となり、大きな飛躍ともなりました。

森林ボランティアである私たちは、豊かな森づくりのためには、その森にかかわる人々が豊かであること、地域が持続的に発展できることが必要と考えてきました。しかし、それは山村だけの問題ではなく、山-里-街の人々の連携によって、はじめて実現できると考えています。今年2月、秩父のカエデ樹液流出が最盛期となる時期に、早春の森とカエデの樹液を楽しむエコツアーを3回行いました。カエデという1つの木を通して山と里と街の繋がりを創りだすことができます。街の人たちには身近に森に親しんでいただくことを、里の人たちには森の恵みを使ったおいしい料理を工夫していただくことを、そして、山の人たちには自慢の森づくりをしていただくことを願っています。カエデの樹液を楽しむ以外にも、美しい季節の森林観察や植林体験を取り入れたエコツアーをこれから取り組んでいきたいと考えています。

森林整備では、秩父にふさわしい森、「森林の復元」にむけて、多くの方々と連携しながら取り組んでいきたいと考えています。ことに、山吹沢県有林の森づくりは、獣害防止柵が整備され、県民自身による県民のための森づくりができる環境が整いつつあります

将来の環境の担い手である子どもたちに対しては、いろいろな活動を通して環境教育の支援をしていきたいと考えています。私たちは、会の定款で次のような4つの事業を推進することを決めています。それには多くの皆様のご支援が不可欠です。どうぞ、よろしく願いいたします。

- (1) 山村と都市との交流促進
- (2) 持続可能な森林・林業モデルの形成
- (3) 環境教育支援
- (4) 地域活性化ビジネスモデルの形成

# 東日本大震災復興支援ボランティア活動緊急報告

3月11日東日本大震災は、自然災害としてかつてないほど大きな被害をもたらしました。「森は海の恋人」を提唱され、何度も秩父に来ていただいた気仙沼の畠山重篤氏も被災されました。人と自然との共生を目指してきた私たちにとっても事実をしっかりと受け止め、被災された方々に少しでも役にたつことを願って、気仙沼への支援活動に参加してきました。

私たちは、未曾有の災害をもたらした東日本大震災に対して少しでも復興の役に立ちたいと復興支援ボランティア活動に参加する準備を進めていた。寸断されていた交通網は少しずつ復旧し、ガソリンも全国各地から関東、東北へと安定的に供給できるようになった。被災地へのボランティア活動に参加できる環境がと整いつつあった。いまだ受け入れ態勢が十分にそろっていない地域も多くあり、ホームページや電話などで事前に状況確認することが必要であった。全国社会福祉協議会(全社協)によると、岩手、宮城、福島など東北関東7県で計84カ所の災害ボランティアセンターが設置されていた。その多くがボランティアを「県内在住者」に限定し、県外から受け入れているのは少ないのが実情である。ゴールデンウィーク中は被災地へ県外から多数のボランティアが入り支援作業を行う見通しで、被災地のボランティアセンター(VC)では、期間中の新規受付を中止する事態が相次いで起こった。多数の申し込みを受けて、宿泊場所や派遣手段が確保できないほか、交通渋滞の原因にもなりかねないため、多くのボランティアセンターが、ゴールデンウィーク後に来てほしいと呼びかけ、連日1000人以上のボランティアを受け入れてきた気仙沼のボランティアセンターも受け入れ中止を決め、電話も通じなくなってしまった。私たちは、新聞、テレビ、報道などで被災地の状況把握に努めた。

気仙沼市唐桑町の畠山重篤氏は、牡蠣養殖業を営み、「森は海の恋人」を合言葉に植樹運動を続けられ、埼玉の森づくりにも大いに協力して下さった方である。一昨年は中学生向けの環境教育活動である「森を語ろう」で秩父歴史文化伝承館を会場に講演をしていただいている。私たちにできることは何でもやるということで準備にかかり、ゴールデンウィーク初日に現地入りを決めた。出発にあたり、秩父地域の会員からも多額のお見舞金やこの日のため焼いてくれた段ボール10箱分のパンをお預かりした。車は必要な装備や託された支援物資で一杯となり、28日夜4人が乗り合わせて出発した。高速道路は郡山を過ぎるあたりから渋滞が始まり、仙台市から一関にかけては、応急処理されたものの震災で波打つ路面を進んだ。車窓を流れる桜の並木や高台の公園に咲く桜は、いまを盛りと満開である。一関までのサービスエリアや一関からの道の駅には、「東日本大震災支援車」と書いた大型バスやトラック、ライトバンが多く駐車しており、色々なユニホームに身を固め、名札と腕章を付けた人々をたくさん見かけた。中には、医療、看護、食事、ケア、瓦礫撤去などの仕事の内容が明記されたものもあり、これらの人たちが応援に駆け付けるのかと思うと、日本人はまだ捨てたもんじゃないと力強く感じた。

旧室根村(現一関市)を経るまでは、大きな被害の後は見られなかったが、気仙沼市街地に入り港に近づくと、大きな惨状が眼前に広がった。津波で破壊された数十棟の冷凍倉庫、気

仙沼港に流れ込む川には、乗用車やトラックが水に浸り、大小の船が橋げたに喰い込み、遠洋漁業の大型船が岸に乗り上げて、赤い船腹を見せて横たわっている。幅50メートル、長さ300メートルにわたって3日間燃え続けた中心街は壊滅状態で、幾度も爆弾を落とされた戦争の後のようである。今回の震災・津波の惨状は、自然の災害とはいえ余りに酷く、写真を撮ろうとしても涙が出て一枚もシャッターを押すことができなかった。

行き止まりの道を幾度か迂回し、気仙沼からは東の太平洋側、唐桑半島の付け根にある畠山さん宅に急いだ。小さな峠を越えて海に近づくと、この地に集落があったのかと思うほど何も無い。瓦礫が整理されて面影もないが、屋敷の土台や門の一部が残るのみで、道も土砂を集めて盛り上げた仮の道路で、車が1台ようやく通れる程度である。海岸わきの坂を25mほど上がった高台に残る畠山さんの家は、集落の避難所となっており、庭先で作業をしていた黄色のよく目立つヤッケを着た畠山さんに、すぐにお会いすることができた。海岸わきの事務所や加工場、養殖筏、ブイや網、ロープすべてが流され、防波堤や港も損傷し、電気や水道も復旧していない状態であった。心からお見舞いを申し上げ、預かってきた物資を手渡し、翌日の作業を約してその場を辞した。



(気仙沼市街(左)と唐桑半島(右) 気仙沼VCマップより)

## 海の力は変わらない！「森は海の恋人」運動、畠山さんのこと

畠山さんは牡蠣の養殖から、森と川と海との大切な繋がりに気がつき、「森は海の恋人」を合言葉に植樹運動を続けている。1943年生まれ、京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授もつとめ、「日本汽水紀行」、「漁師さんの森づくり」など多数の著作がある。

牡蠣の森、それは岩手県室根町室根神社から始まった。牡蠣の養殖を営むなかで、「磯焼け」という魚介類消滅の危機を救うために、河川上流域の緑化の必要性を訴え、大漁旗をなびかせて室根山の植林を実行した。その成果は小学校の教科書に取り上げられ、幅広い緑化運動の啓発に取り組んでこ

られた。「森は海の恋人」という魅力的な呼びかけに応じて、全国から植林にきた参加者に、畠山さんは次のように話されている。「みなさんが山を緑にしてくれたおかげで、下流の海に海藻の森が甦った。そして、一番大切なことは、みなさんの心の中に緑が育つことだ」。気仙沼湾に流れ込む大川の水源地の山に鎮座する室根神社の祭礼には、昔から漁民たちが海水を供え、塩でご神体を清める神事があることから、昔の人は森を海とつなげて考え、上流と下流が感謝し合う関係があった。このような関係を取り戻し、上流の山々を緑化すれば、日本中の海底も緑にしていけるのではないか。そのために、日本中の人々の心の中に、本当に緑を育てる心が育つことがまず必要なのだということではないか。

私たちの入った気仙沼には、大小の湾や半島が数えきれないほどあり、半島と半島の中の少し開けた美しい入り江の一番奥まったところに港と集落があったという。畠山さんが牡蠣の養殖を営む静かな入り江も津波に襲われ、集落は高台の3軒を除いて流された。水は25mの高台にある畠山さん宅の足元にも迫った。

「大津波警報から30分ほどで潮が引き始めた。そのあと風呂の水があふれるようにフワーと海面が盛り上がった。引き潮で湾の3分の1ぐらいが黒々と底を見せたかと思うと、黒い空のような水の壁が狭い湾いっぱいになり、ダーッと来た。低地の家は持ちこたえられず、加工場や事務所も呑みこまれた。兩岸の杉の大木が根こそぎ引き抜かれた。3歳の孫を抱いて裏山の雑木林を駆け上がった。屋根がどんどん流されていった。暗くなり寒くなる。何が起きたのか想像できなかった。ラジオだけが頼りで、やがて、巨大津波だとわかった。避難訓練など備えはあったが、ほとんどの人は51年前のチリ地震津波の記憶しかなかった。明治の三陸大津波の体験者はいない。人間の記憶も100年経つと失われる。……養殖筏はすべて流された。それでも漁業に希望はある。再開できる。農地は塩害で使えないが、海が生き物を育てる力は変わらない。海にプランクトンという実りをもたらす。森も川も健在だ。大災害だったが、自然そのものは残っている。ノリやワカメは、秋に種を入れれば春先には収穫できる。牡蠣も秋に仕込めば春には採れる。」

海を豊かにするために森に木を植えようと22年前に立ち上げた「森は海の恋人」運動を続けるという。畠山さんは、「毎年6月に植樹イベントを開いてきた。今はそれどころじゃないという気持ちだったが、大川上流の一関室根町の人々たちがぜひやろうという。復興の光明とらえた方がよい、と。100人近い震災孤児たちがいるので、チャリティ的なものを考えている」という。畠山さんの強い意志が、私たちにとって何よりの励みである。

## 甦れ、ブナ

翌朝、地下足袋にヘルメット、二丁掛けの腰鉈とのごぎりを身につけ畠山さん宅を訪ねた。九州からも来ているボランティアの方々と一緒に、畠山さんが「汽水の道」と名付けて造った海岸に沿う敷石の道の修復作業をおこなった。道に崩れかけた倒木や土砂を排除しながら、道を修復するのである。この道は象徴的な道ですから早く元に戻したいと、畠山さんご長男も小型ユンボを操って作業をされる。木を切り、石を動かし、土を均していく、私たちの日頃の山仕事が海にきて生かされるのは

嬉しかった。

午後からは港近くにあった作業場の跡かたづけ。事務所、作業加工場、仕事に使ったすべてのものを津波は破壊し、攫っていった。残ったものは、どこから流れてきたのかもわからない瓦礫の山である。そんな瓦礫の下に、かすかに開葉を始めた樹が横に倒れ、2畳ほどの赤錆びたトタンが隠れていた。ブナのような地域にはないはずで、半信半疑瓦礫を取り除いてみると、正真正銘の樹令30年ほどのブナであった。秩父に植えている樹もブナである。私たちには思い入れの強い樹であるが、黒い波に揉まれても生き残り葉を上げ始めたブナを何とか生き返らせ、次の時代につなぐ生きる希望であれと願い、引き起こすことにした。1m近く根の周りを掘り下げ、ロープをかけて車で引くと、一度ですくと立ち上がった、ブナが私たちを待っていたかのように。材木を斜交いにかい、落ちていた板に、「甦れ、ブナ」とマジックで書いて幹にそっと立てかけ、植木職人をしてボランティアのリーダーに後を託すことにした。

他の作業を一通り終えて、挨拶に伺うと、このブナの植えた人がわかった。平成元年に室根山にブナをはじめ植林したときに、苗の中から2本を選び、子どもたちが遊ぶ公園の日陰になればと、畠山さんの奥様が植えた樹であった。最初に報告した相手が当のご本人であり、もう諦めていたと大変喜んで下さった。帰り際にもう一度ブナの樹にふれながら、私はブナに語りかけた。

「津波の海水塩分と砂地でよく育つかまだわからない。だけれど、お前が大きく育って、生きる希望になってほしい。また来るから、それまで元気でいてくれよ。よく育っていたら、この泣き虫じじいが、また大きな声でよかった、よかったと声をかけてやるからな。」

私のそんな独り言を聞きつけたのか畠山さんの長男の子が、「また、津波がきたらどうなるの」と真顔で尋ねてきた。

「また起こしたら、ええんや。」

「大きくなりすぎて起きるかな。」

「ええんや、抱き寄せて水をやる。たのんだよ。」



今回の復興支援活動では、実に多くの人たちからご支援をいただいた。ことに宿泊場所と心のこもった食事を用意して下さった室根町のIさん母娘には大変お世話になった。寝袋覚悟の活動であったが、ふかふかの布団を用意して下さり、採れたての食材が私たちの元気のもとになった。室根山麓の旧家で、代々田畑を耕し、山を守ってきたのである。気仙沼湾にそそぐ清らかな大川の水も、Iさん母娘のような人たちによって維持されてきたのであろう。国道気仙沼線は大川の流れに沿って東西に走り、被災地気仙沼へは車で30分の距離である。本当に感謝、感謝である。

私たちは、多くの人たちの支えがあることを身をもって知ることができた。だからこそ、復興と再生は可能なのである。一日もはやい復興を願ってやまない。

(T.H)

## 環境教育支援の取り組み

多摩川に清流が戻り、神田川にアユが遡上したことが話題になったことがあります。水の冷たさを肌で感じ水草の中によぎる魚の姿に興奮したことのある世代は、自然とかわり、自然から学ぶことの楽しさを知っています。そのような体験を多くの子どもたちにしてほしい、そんな願いが私たちの「環境教育」支援の出発点です。秩父市ふたば幼稚園の園児たちとはドングリを育てることから、都会の小学生たちとは秩父の森と川と里をフィールドに「夏休み親子森林教室」を、そして中学生たちには、「森を語ろう」と呼びかけ、共に考え、語りあう企画を進めています。2010年8月秩父市大滝での夏休み親子森林教室では、地域の皆様から様々な援助をいただき、充実した時間を過ごすことができました。10月23日、秩父市との森づくり協定にもとづき、市有林での植林活動をふたば幼稚園の年長組の園児たちといっしょに行いました。翌24日、「第2回森を語ろう」では、埼玉県在住のチェバロ製作家横田誠三氏をお招きし、「音楽は森を生かす」をテーマに秩父第一中学校の子どもたちに興味深いお話をしていただきました。これらの活動には多くの皆様からご協力とご支援をいただきました。子どもたちの一つ一つの体験や活動、安全の確保には、大人である私たちの支援が欠かせません。未来の環境の守り手である子どもたちに、これからもご支援をお願いいたします。

2010年8月7日・8日

## 第2回夏休み親子森林教室

キャンプでお世話になったみなさまへ

小学校3年 R.Y

先日のキャンプでは大変お世話になりました。

いろいろなお話を聞きながら、山を登ったり、川であそんだり、魚をやいたり、きょうどりょうりをいただいたり、びっくりするほど広い昔ながらのおうちにとめていただいたり、染物をなったり・・・とても楽しく、また、自然とふれあい、知らなかった埼玉のことを学ぶよい機会をいただきました。

中でも一番いんしょうにのこったのは、川遊びです。カエルをつかまえてかんさつしたことも、見たこともない虫にさわったことも、川の中をかけまわったことも、とてもよい思い出になりました。夜、おじいさんに本をよんでいただいたこともいんしょうにのこりました。ぜひ、またいきたいです。

夏休み親子森林教室に参加して

K.M

私はさいたま市内で生まれ育ち、4人の子をもつ母親です。昨年この教室に参加した友人にさそわれて、はじめて参加させていただきました。街中で暮らす子どもたちにとっては、ゲームやテレビのない生活はとても貴重で、自然の中でのびのび過ごす体験は、必要不可

欠ではないかと思えます。山で生活している方には理解できないかも知れませんが、自然に囲まれた中で過ごすことがないまま成長してしまうと、生きる知恵も身につかない、生命力の弱い人になってしまうのではないのでしょうか。学校行事で林間学校はありますが、今回のように少人数で活動できる山村留学のような活動には、これからも参加させたいと思います。

一泊二日の教室でしたが、山に登って森林についての説明をしていただき、林業をされている方のご苦労も少しだけわかりました。自然を守ることの大切さ、山や川にある危険についても教えていただきました。また、地元の皆さまの厚いおもてなしや山の幸のごちそうもとても美味しくいただき、親子とも本当に楽しく、とても貴重な二日間を過ごすことができました。いろいろな計画をたててくださったスタッフの皆さまに、心から感謝いたします。

外秩父山系大霧山登山



山村生活体験



荒川源流中津川の川遊び



第2回森林教室では、文科・総務・農林3省の連携事業である「子ども農山漁村交流プロジェクト」事業の認定を受け、子どもの体験学習の充実と山村地域の活性化という二つのテーマを取り組みました。秩父市大滝の皆様の暖かな心配りと集落全体で受け止めていただいたことにより、大きな成果をえることができました。また、環境教育の人材育成という観点から大学生のサポート活動を積極的に位置付けてきました。地域の人々の繋がりの中で、子どもたちや学生たちが深く自然に学べるような「森林教室」の活動を今後も続けていきます。

## さあ みんな空気をすって ほら おいしいでしょ。

---



きょうは みんなでそだてた <sup>き</sup>木を <sup>う</sup>植えましょう。

みんながそだててくれた木は <sup>は</sup>葉っぱを いっぱい ひろげてくれます。

そして、ドングリも <sup>た</sup>たくさん <sup>で</sup>きます。

ドングリは <sup>き</sup>木の <sup>あか</sup>赤ちゃんです。 <sup>あ</sup>きになったら <sup>た</sup>たくさん <sup>じめん</sup>地面におちてきます。

でも <sup>じめん</sup>地面におちたら <sup>し</sup>シカさんや <sup>く</sup>クマさんに <sup>た</sup>べられてしまうよね。

そこで <sup>かあ</sup>お母さんの <sup>き</sup>木は <sup>か</sup>んがえました。 <sup>な</sup>んだと <sup>お</sup>もう。

<sup>かあ</sup>お母さんの <sup>き</sup>木は <sup>は</sup>葉っぱを <sup>た</sup>たくさんおとして <sup>ど</sup>んぐりの <sup>あか</sup>赤ちゃんを <sup>か</sup>かくしてあげるの。

<sup>は</sup>るになって <sup>め</sup>芽がでるまで <sup>は</sup>葉っぱのおふとんで <sup>ま</sup>もってくれるんですって。

<sup>は</sup>葉っぱのおふとんは <sup>あ</sup>とで <sup>ちい</sup>小さな <sup>むし</sup>虫さんや <sup>み</sup>ミズさんが <sup>も</sup>ぐもぐ <sup>た</sup>べてくれます。

いっぱい <sup>た</sup>べると <sup>な</sup>にがでてくるとおもう。

ウンチね、 <sup>むし</sup>虫さんや <sup>み</sup>ミズさんも <sup>う</sup>ンチがでます。

<sup>は</sup>葉っぱが <sup>ど</sup>んどんたべられて <sup>こ</sup>まかくなったり <sup>う</sup>ンチになったりしていくと

<sup>ど</sup>んぐりの <sup>あか</sup>赤ちゃんに <sup>と</sup>っても <sup>えい</sup>栄養になる <sup>ふ</sup>腐葉土 <sup>と</sup>いう <sup>つち</sup>土になります。

<sup>つち</sup>この <sup>お</sup>土は <sup>お</sup>大雨が <sup>ふ</sup>つても <sup>ス</sup>ポンジのように <sup>み</sup>水を <sup>た</sup>たくさん <sup>す</sup>ってくれます。

<sup>あ</sup>め <sup>み</sup>水が <sup>そ</sup>の中を <sup>と</sup>おっていくと <sup>と</sup>っても <sup>お</sup>いしい <sup>お</sup>水になるんですって。

みんなが <sup>お</sup>いしい <sup>お</sup>水を <sup>い</sup>っぱいの <sup>め</sup>るのも <sup>お</sup>母さんの <sup>き</sup>木が <sup>は</sup>葉っぱを <sup>た</sup>たくさんおとしてくれた <sup>か</sup>らなのね。



そして たいせつなことが もうひとつあります。

いま <sup>ちきゅうおんだんか</sup>地球温暖化といって <sup>ちきゅう</sup>地球がすこしずつ あたたまってきているんですって。

どうしてかというと

<sup>も</sup>燃やしてはいけない ペットボトルなどを<sup>も</sup>燃やすと <sup>にさんかたんそ</sup>二酸化炭素というガスがふえて

<sup>ちきゅう</sup>地球が あついよ くるしいよと っているんですって。

さあ みんな <sup>くうき</sup>空気をすってごらん。ほら おいしいでしょ。

はい はいて。

みんなが <sup>いき</sup>はいた息も <sup>にさんかたんそ</sup>二酸化炭素なの。

でも まわりの木の葉っぱを <sup>み</sup>見てください。

<sup>き</sup>木の葉っぱは みんなが<sup>にさんかたんそ</sup>はいた二酸化炭素を <sup>くうき</sup>おいしい空気に <sup>か</sup>かえてくれるんですって。

とても おりこうさん でしょ。

あついよ くるしいよとっている<sup>ちきゅう</sup>地球を たすけています。

みんながおおきくなって <sup>おとな</sup>大人になったときでも

おいしいお水が<sup>みず</sup>のめたり <sup>くうき</sup>おいしい空気がすえたりできるといいね。

だから みんなに <sup>き</sup>木を植えてもらいたい。

<sup>てつだ</sup>お手伝いができるかな。

きょうは みんなで <sup>ちきゅう</sup>地球をたすけてあげましょう。 (かずこ先生のお話から)



2010年10月20日、秩父市有林2ヘクタールの森づくり協定が、秩父市、ふたば幼稚園、NPO法人秩父百年の森の三者により結ばれました。子どもたちが健やかに成長していくために、子どもたちの環境も同じように大切に、育てていきたいものです。私たちは、子どもの成長と一緒にしながら森も育てていくことを願っています。多くの皆さまのご支援をお願いいたします。

## Believe、チェンバロと歌う



私たちが住む秩父市の森林は、どのくらいあるか知っていますか。市の面積の87%が森林でおおわれていると言われています。秩父市は、長い日本列島の真ん中にあることから、多くの種類の樹木や草花に恵まれた「森のふるさと」でもあります。森は、私たちの暮らしや文化にも深く関わってきました。しかし、その森は今どうなっているのでしょうか。秩父の森のことを中学生の皆さんと一緒に考えるために、私たちは「森を語ろう」という活動をしています。去年は、宮城県のカキの漁師である畠山重篤さんにきていただき、森と海が深く結び付いていることを「森は海の恋人」と題してお話していただきました。

チェンバロの製作者であり、埼玉県内にお住まいの横田誠三氏をお招きし、『音楽は森を生かす』と題して、木を活かすことの大切さや楽しさ、そして難しさについてお話していただきます。500年の歴史をもつチェンバロ1台には、10種類以上の様々な木が使われています。果たして、日本や秩父の森で育った木から、すてきな音色を奏でる楽器をつくることができるでしょうか。私たちは、そんな森を育てていくことができるでしょうか。チェンバロの興味深いお話から、そんなことも考えてみたいと思います。

### <チェンバロの歴史>

(演奏)

フィオッコ作曲のアダージョ。

フィオッコという作曲家の名前を聞いたことがある人はいますか。ヴァイオリンを習った人はひょっとしたら知っているかもしれませんが、今から250年以上前、1750年頃に活躍した音楽家です。チェンバロの話するには歴史の話をしないとけません。歴史の嫌いな人がいるかもしれませんが、ちょっと我慢してください。1750年頃というと日本は江戸時代です。チェンバロはその頃のヨーロッパの楽器で、王侯貴族に大変愛されました。見るからに王侯貴族の楽器ですね。蓋には油絵で風景画が描いてあります。私はチェンバロを一人で作っていますが、絵だけは友達に描いてもらっています。なかなか綺麗な絵ですね。その時代には、このような絵を描くのがひとつの流行でした。アルカディアといいますが、昔のヨーロッパの人が考えた古代の桃源郷の絵が描いてあります。チェンバロの話をするときは、装飾のスタイルとか様式、そういったものが重要になってきますが、このチェンバロはロココ様式、1800年の少し前に愛されたスタイルです。

みなさんの家にはピアノはあるけどチェンバロはない。どうしてでしょうか。

それはチェンバロという楽器は、今から200年くらい前に一度滅んだ楽器だからです。

18世紀の末、フランス革命などヨーロッパが革命の渦に巻き込まれますね。それ以前は王侯貴族の時代でしたが、その後は市民の時代になります。王侯貴族と一緒にチェンバロは滅んでしまいました。そして、例えば博物館の中に、あるいは屋根裏部屋に、あるいは寒い冬には憎い王侯貴族が使ったものとして暖炉の中に入れてしまった楽器もたくさんあった。

そうやって滅んでしまった楽器が、今なぜここにあるのでしょうか。今から50年くらい前から、皆さんの知っているバッハやそれより以前の古い音楽を新たに研究したい、聞いてみたいという「古楽」の活動が盛んになりましたが、その先陣を切ってチェンバロという楽器が復興されました。博物館に残っていた楽器をいろいろ調べて新しく作ったのです。博物館はそういう図面を出版してくれずからね。

今聞いていただいたフィオッコは、チェンバロが滅びる直前、1750年頃にフランダーズ、今のベルギーやオランダあたりですが、その辺りで活躍した音楽家です。この楽器はその時代のフランダーズのスタイル、様式の楽器なのです。

チェンバロが作られはじめたのは、更にそれより300年以上も前、だいたい1400年頃からチェンバロという楽器は使われていたのです。そのころのチェンバロはどんな楽器だったかという...。いま私が手に持ってい



横田誠三氏略歴

チェンバロ製作者。1951年東京世田谷生まれ。東京大学農学部農業工学科卒業後、林産学科木材物理教室研究生として木材の研究をするかたわら、堀栄蔵の指導を受け製作を開始。多くの演奏家のコンサートや録音で調律を担当。講演活動やグローブ音楽辞典などの古楽関連図書の翻訳監修のほか、サロンコンサート「折々の会」を主催。著書に『鍵盤調律法 理論と実践』。東京芸術大学非常勤講師。日本音楽学会会員。





るような小さい楽器、オッタヴィーノ・アルピコルドといいますが、このようにシンプルなもの、チェンバロの最初の形だっただけだと思っています。こうして縦に見るとハーブの形がはいつていますね。チェンバロのことを英語ではハーブシーコードといいますが、ハーブが入っていますね。この楽器は1オクターブ高い音がしますからオッタヴィーノとか、あるいはスピネットと呼ばれています。当時はどうもアルピコルドと呼ばれていたらしい。それでは、このかわいい楽器どんな音が出るか聴いてください。曲はちょっと時代が下がりますが、ルネッサンス時代のイギリス、シェイクスピア、エリザベス一世、そういった人たちが活躍していた時代に、ファーナビーという人が書いた、スパニョレッタという曲です。

この可愛い楽器が、250年くらいかかってこういう大きい楽器に発展していくわけですね。ルネッサンス音楽の時代からバロック音楽の時代までです。この後はどうなるかという、実はチェンバロは滅んでピアノの時代になってしまいます。ピアノの原型はチェンバロが滅びる前から出てきていますが、決定的だったのはモーツァルトです。1750年にはバッハが死に、1756年にモーツァルトが生まれます。バッハの死をもってバロック音楽の最後ということに音楽史ではなっています。その直後、ベートーベンが生まれるのは1770年ですから、そのわずか20年後です。その前後でチェンバロは下り坂になってピアノが台頭してきます。少年モーツァルトはチェンバロを弾いていましたが、青年モーツァルトはピアノに夢中になった。そうしてチェンバロは音楽の表舞台からどんどん駆逐されていなくなってしまったわけです。

#### <チェンバロの仕組み・用材>

チェンバロはピアノの先祖です。でも音が全然違いますよね。その秘密を次に探ってみましょう。ピアノは、皆さんご存知のようにフェルトのハンマーで弦を叩いて音を出しています。チェンバロは、これがジャックという部品ですが、これが鍵盤の奥にのっかっているのです。鍵盤を押すと持ち上がって、鍵盤を離すと下がる。赤く見えているのがダンパーです。これで弦の振動を止めるわけですね。その下の黒くて小さいものが付いて

いるでしょ。それがプレクトラム、弦をはじく爪です。これが何でできているかというと、昔は鳥の羽軸を使ったんです。これでないとなかなか良い音がでないといつて、今でも使いますが、この楽器のものはプラスチックです。ジャックが持ち上がってプレクトラムが弦をはじくと、ジャックが下に戻ってくるときもう一回弦をはじいてしまいますね。そうすると楽器になりませんからちょっと後ろに逃げるようになっています。そのしかりに使われているバネは、昔は何を使っていたかという、イノシシの毛です。高級なヘアーブラシを持っている人は、それがイノシシの毛です。ジャック本体は、いよいよ木ですね。この本体は上下にスライドしますから、ざらざらした木ではいけない。梨の木を使います。西洋梨、ペアウッドです。

それはスベスベだからです。林檎の木も似た感じですね。このペロペロと動くところをタングといいますが、ここにぎゅっと鳥の羽軸を押し込んでとめてありますから、弱い木だとプチッと割れてしまう。割れては困りますので、ここは特別な木を使います。何だと思えますか。皆さんも知っています。ヒラギです。あれは本当に割れない。他の木だとプチッと割れますけどね。ヨーロッパではヒラギの木をホリーと言いますが、昔は手作りの小さな機械では硬い木というよくホリーを使うんですね。僕が知っているのでは、スイスの時計のメーカーが歯車を磨きあげる最後の段階でホリーの木をつかって歯車を研磨調整しているところを見たことがあります。

チェンバロをさっきご覧になった人は、二段鍵盤になっているのに気がつかれたと思います。二段鍵盤がどうなっているのか説明したいと思います。

下鍵盤を弾く

上鍵盤を弾く

上鍵盤がちょっと軽くて明るい音がしたのがわかりますか。下鍵盤がちょっとメゾフォルテだとしたら、上鍵盤がメゾピアノくらいですか。この違いが音楽では重要です。上下の鍵盤は別々の音をもっていますが、上鍵盤を奥に押し込むと、下鍵盤を弾いたときに上鍵盤が連動します。

二倍になりますね。今度は、フォルテになりましたよね。下鍵盤にはもうひとつ別の音があるんです。こんな音です。

これはさっきより1オクターブ高い音で、これを4フィートといいます。これをさっきの音とミックスします。

とまあ、こんなような楽器なんです。素敵でしょ。さきほどのジャックがこちらの大きな楽器には183本、こちらの小さな楽器には47本入っています。

さて、チェンバロにはどんな木が使われているのかも少し見ていきましょう。まずこのアルピコード、上から見える弦が張ってあるところが響板です。ここはヴァイオリンなどと一緒で、3mmくらいしか厚みがない。そこに弦が張ってあるから音が響くわけですね。響板は針葉樹、松とか杉の仲間、その針葉樹の中でも楽器用材としては最高級のドイツフィヒテという木です。英語で言うとスプルース、日本語で言うとトウヒという木です。鍵盤は黄色く見えますね。これはツゲの木です。また皆さんと関係ある、そうツゲの櫛ですね。硬くてスベスベしているからこういうところに使うのに向いているのです。黒鍵は黒檀というアフリカやインドでしかとれない木です。

とても貴重な木で今はワシントン条約で保護されていて使えなくなっている。それからこのアルピコードの胴体。やはり黄色っぽいですが、この木はサイプレスあるいはツィープレスといいます。日本語でいうと糸杉。糸杉というと皆さんがまず思い浮かぶのはゴッホの絵ですね。あの蠟燭みたいにひゅーっと立っている糸杉です。ヨーロッパでは昔から糸杉をこういうことに使っていたのです。日本でいうとカヤノキが近いです。匂いをかいでみるととっても良い匂いがします。

こちらの大きな楽器の方は全体がペイントで塗りつぶしてありますから何の木でできているか見てもわからないと思います。音を聞いてもわかるものではないですけど、シナノキ。ヨーロッパの言葉ではライム、あるいはリンデンです。響板の上には弦が張ってあって、弦を持ち上げていますね。馬みたいに持ち上げているのでこれを駒と言いますがフランス語でシュヴァレ、馬、英語だとブリッジ、橋になっちゃいますね。ヴァイオリンの駒もブリッジといいますね。駒はカエデです。

チェンバロの場合はこんなに大きいものですから、こんなに大きいカエデの板から切り出して作ります。ヴァイオリンの駒だったらこのくらいの小さな木でできますが、ヴァイオリンはなかなかいろいろとうるさい楽器で、硬くて緻密な特別なカエデじゃないとダメなのです。チェンバロの胴体には、シナノキの他にホプラとか、様式によって違うのですがクルミの木とか、ナラの木とか、そういう木も使います。これらの木はいわゆる家具材といわれるものですが、特別に大きな木でないと作れません。たとえば、チェンバロのここからここまで大きく曲がっている部分は2m近く、幅も30cmくらいありますね。曲げるのはこうやって台にギュッと締めつけて、布で濡らしながらアイロンでジュージュー熱して曲げていくのです。ですからもしここに節があったらバキンと折れちゃいますし、それから目切れといって、木は繊維がありますが、流れて途切れていると簡単にめげちゃう。ですからとっても素直な良い木じゃないと綺麗に曲がらないのです。

こちらの大きい方のチェンバロには、ピアノと似た配色の鍵盤がついています。黒いところは黒檀ですが、白いところは何だと思えますか。今のピアノは、アクリル樹脂、プラスチック使っています。ちょっと前のピアノは高級品だと象牙を使っていました。もちろん今はワシントン条約でそんなもの使っちゃいけないってことになっています。この楽器は、1750年頃の楽器は、象牙はまだそんなに使ってなかった。牛の骨を使っていました。牛の骨って、肋骨とか頭蓋骨とかは使いませんよ。4本脚の太い骨。一頭に8本太い骨がありますね。骨っていうのは、話が木からはなれますが、丸っこい三角の断面をしていて、中はからっぽなのです。固い油が詰まっている。両端にはこう拳骨がついています。この拳骨のところは使えない。三角形の筒みたいなのから何枚くらいとれると思えますか。2枚です。三角形しているのだけど、一面は腱か筋の通る穴があって使えないのです。だから、2枚しか取れない。それで4本の脚で16枚とれるかな、うまくいくとね。まあそんなわけで、この楽器には白い鍵盤が72個ですから、牛何頭分でしょうか。昔からそういう自然素材を上手に使ってきた。アクリルの鍵盤ですと濡れてくると滑りますよね。それから、ちょっとふくと傷だらけになっちゃう。なかなか弱いものです。象牙の鍵盤は、300年前の楽器でも磨り減ってはいますが、

横田誠三氏作品



フレンチ・チェンバロ  
(1984年製作)



イタリアン・チェンバロ  
(1998年製作)



ジャーマン・チェンバロ  
(2004年製作)



北大ボラ・チェンバロ  
(2006年製作)

そのままです。そしてやっぱり手触りがいいですね。木と同じで指に親和性があります。滑りにくいし、かといって吸い付いちゃわないし、そういう良さがあるのです。まあ自然素材の良さを最大限に生かしてその頃から使っていた。私たちがこのチェンバロを復活するときにも200年、300年前のものを先生にして、博物館などの資料を見て作っています。なるべく現代的な素材を使わないで、昔のやり方でやっています。



#### <チェンバロを作る>

私たちのふだん身の回りにある品物、例えば自動車、洗濯機、椅子、そういうものは昔のものとは大きな違いがあります。それらは大量生産によってつくられた、大量生産だからこそのものです。例えば自動車一台特別注文しようと思ったら何十億ってものになっちゃうでしょ。それがわずかに100万円とか200万円で買えるわけですね。

iPod だって一台作ろうと思ったら何億円かかるかわかりません。そんなものが2000円とかで買えますよね。現代の品物は大量加工で大量に加工する。そのためには規格化する、例えばどのネジをもってきてもサイズがあります。そういうふうに規格化して精密な細工をする。組み立てるときも、分業化して流れ作業で組み立てる。そういう生産のためにいろいろな工夫があります。ですから「木」のようなばらつきのある素材は使いにくい。なるべく均一で規格化された素材や部品を使って品物が作られている。プラスチックはその典型になりますが、今鍵盤の話でもしたように、プラスチックにもいろいろな弱点があります。意外と弱わかったりします。

昔の楽器を作り上げている素材、木材やカラスの羽の軸、イノシシの毛や牛の骨、そういう自然素材というのは不均一です。均一ではありません。木はどう不均一なのかといえば、まず今見てきたようにいろんな樹種を使っています。樹種によって、本当に重たくて持ち上がらないような木もあれば、パルサのように軽くて柔らかい木もあります。そういう不均一さです。またヒノキならヒノキでも谷筋で育った木と尾根筋で育った木とは性質が全然違います。秩父の人はそういうことをよくご存知だと思いますが、この谷でとれたから、どこの峰でとれたからこれはいくらくらいだ、というくらい質が違うわけです。要するに一本一本の固体によって違いがあります。不均一です。それから他にもこんな不均

一さがあります。同じ一本の木でも、根元の方の質と上の方の質とで全然違います。それは、元とか末、元玉、二番木などという言い方をしますが、ずっと上の方へ行くと節だらけで使えないですよ。下の方へ行くとこんな形に開いちゃって使えない。そういう不均一さがあります。それからこの話はまた後で触れることになってきますけど異方性という、方向によって性質が違うということが重要なことです。木は成長して、繊維がこういう風に通っていますね。たとえばこの木で厚さ1cmの板を作れと言って、このように1cmに輪切りにする人はいないですよ。輪切りにすると簡単にパキって折れてしまいます。長さ方向にとっても、柾目にとるか板目にとるかという二通りの大きな違いがあります。ですから同じ木でも異方性があるから、どのように使うかによって、用途によって板目にとるか、柾目にとるかという問題がでてきます。他にも節、虫食い、割れなどという不均一。

「わあ、節があったね」って言うと材木屋のオヤジさんが「節がなきゃ木は育たないんだよ」と言われますが、節は枝の出た後ですから、それがなくて葉っぱがつかないですよ。だから節は、ぼくらにとっては本当に困り物ですけど、木にとっては節がなきゃ育てない。まあそんなものなのです。

そのような大量生産に向かない性質の木は持っていて、例えばお寺を建てたり、芸術的な物を制作したりする時は、それほど障害にならないかもしれませんが、チェンバロのように機械のような物を作るときにはある意味とても困った性質です。しかしながら、いろんな種類の木があるから、いろんな性質の木があるから適材適所で使うことによって、選んで使うことができますからとても役に立つ。

現代の品物は大量生産、昔の品物はいろいろ苦労して一品ずつ制作していたようなお話をしてきましたが、事実たしかにそうなのですが、チェンバロという楽器は実はその昔に「量産」されていたのです。17世紀のアントワープにリュッカーズという有名なチェンバロ製作家の一族がいて、チェンバロを「大量生産」しました。僕の場合は、絵を除いて、一人で仕事をしていますからだいたい平均すると1年に2台くらい作ります。それでもいろいろなモーターのついた木工機械もあるので早いのですよ。昔でしたらそういう作業もみんな手でしますから大変だった

でしょう。ところがそのリュッカー工房では、だいたい月に四台くらいのペースでチェンバロをつくっていた。素晴らしい速さです。もちろん部品によっては外の工房で外注でやって、当てはめたりするわけですが、単純な、今お話ししたような現代的な量産ではないのです。現代的な大量生産は数値化規格化することによってはじまる。ところが木を使って大量生産をするということは、そういうわけにはいかない。そこには今では忘れられがちなさまざまな知恵が盛り込まれています。ま、当たり前といえば当たり前のことですが、「現物合わせ」というのもとても重要なコツなのです。図面描いて寸法でやりたくなりますが、木がそれを許してくれない。実際作ると削る度に木は曲がってきますね。そういうのをなだめすかしてゴマカシてやる。このジャックは四角い穴にびっちり納まっています。上下に滑らかに動かすためには緩くないといけなければガタガタじゃ困ります。それでどうしたらいいか。もちろん、現物合わせでなるべく丁度いい大きさにカンナややすりで調整します。もう一つ知恵があります。胴体をテーパーに少し先細りにしておけば、この位置ではびっちりしていますが、動いたときにはゆるくなります。要するに必要なところではキュッとになりますが、必要のないところではスッと抜ける感じ。テーパーにすることによって、手で作るには平行に作るよりはるかに作りやすい。こちらは狭くても、ある程度いいかげんでいいわけです。その程度の精度で済むように設計しますし、木は湿気を吸っていますから、それくらいの精度しか必要としないのが実際です。

よく「髪の毛一本の正確さ」などといわれますが、髪の毛を測ってみるとだいたい 0.1 mm くらいはあります。薄い紙一枚ですと 0.15mm から 0.2mm くらいです。一方、手カンナでどのくらいの寸法の精度を得られるかというと、カンナで削っていくと 20 回くらいでは 1mm も減らない。20 回で 1mm だとしても一回あたりは 0.05mm。腕のたつ大工さんになると、カンナかけコンクールでたしか 3 ミクロンくらい、つまり 0.003mm のこんなに大きなカンナくずを大きな板から削れるのです。木を使う知恵や技術は日本にもとってもいいものが沢山あります。でもヨーロッパには大量生産的に、また機械を作るという意

味での木を使う技術があり、これは尊敬しないといけない素晴らしい技術です。ヨーロッパでも一時期忘れられつつあったようですが、今またしっかりと復活しています。

ヨーロッパの博物館には 200 年、300 年前の楽器が残っていますが、木はそんなにも長持ちするものです。日本の法隆寺は 1500 年経ちますが、こういう楽器でも 300 年くらい平気でもちます。ただし 30 年くらいすると...この楽器はもう 20 年近くも経っていますが、だいぶ汚れてきましたね。そろそろ、見飽きてきたから最近の流行の模様にとそろそろ塗り替えよう、そうしようしようと、楽器を塗り替えるわけです。そのとき「ああ、ちょっと虫喰っちゃったねえ」「じゃあここ埋めとこうか」そういう修理がすごくしやすい。その辺も木材のもっている良さになります。こういうものは現代的な大量生産に慣れた視点ばかりでは許されないことになってしまいます。いろいろな知恵をつかって、昔のものとなるべく同じように作ってみることに

よって、現代的な物作りと違う面白さを日々感じながら仕事をしています。

チェンバロを作る楽しさはいろいろありますが、なんといっても 200 年も前の音楽をその頃と同じ音で聞けるのです。ほんとに全く同じかどうかわかりませんが、近代的な大きなオーケストラの響きとは全然違いますし、あるいは電気楽器でウィンウィンウィンやるような素晴らしい音楽とも違います。好きなときに好きに聞ける iPod とも全然違います。昔の音楽を昔の生の音で聞く。そういう楽しさがチェンバロを作って一番嬉しいことです。もう一曲チェンバロの演奏を聴いて頂いて終わりにしたいと思います。聴いていただく曲はヘンデル。みなさん合唱部だからハレルヤは歌ったことがあるかもしれないですね。ヘンデルの組曲の中から一曲聴いて頂きます。「調子の良い鍛冶屋」というニックネームのついている曲です。プレリュードをつけて 5 分くらいの曲にまとめてあります。ヘンデルの「主題と変奏」を聴いていただいて、おしまいにしたいと思います。どうもありがとうございました。(1 部終了)





*Program*.....

はじめの言葉

- 1 主催者あいさつ.....島崎武重郎(NPO 法人秩父百年の森 理事長)
- 2 校長先生あいさつ.....伊古田孝志(秩父市立第一中学校 校長)
- 3 来賓あいさつ.....久保忠太郎(秩父市教育委員会 教育長)

第1部 講演と演奏「音楽は森を生かす」

講演 .....横田誠三氏

- チェンバロって何？(チェンバロの歴史と仕組み)
- チェンバロを作る

演奏 .....横田まゆみ氏

- J.H.フィオッコ “アダージョ”
- G.F.ヘンデル “主題と変奏”

第2部 「森を語ろう」シンポジウム～森の木から作る～

- 清川徳好氏(秩父市大滝林業家・元旧大滝村助役)
- 江野久雄氏(江野工務所代表・一級建築士)

質疑応答(中学生から・参加者から)

休憩 「チェンバロを見よう・触れよう」

自由にチェンバロをご覧ください。

第3部 チェンバロと秩父一中コーラス部との協奏

曲目:“Believe(ピリープ)”

指揮:印東公民(秩父市立第一中学校 教諭)

終わりの言葉.....大嶋洋一(秩父市立第一中学校協力会 会長)

第2回「森を語ろう」シンポジウムを終えて

秩父の木からチェンバロは作れるでしょうか。不用意な私たちの質問に、ととても丁寧にお答えを返していただきました。「いまは、無理です」。そのお答えの重みに気づかされます。チェンバロの響きと和すかのようなコーラス部の子どもたちの美しい歌声に、未来への希望を見ていただきました。それほどまでに、子どもたちの歌声は美しく素晴らしいものでした。「いまは、無理です」。私たちは、私たちの森から本当に価値あるものをこの子どもたちと一緒に生み出していかなくてはいけないのだと思います。興味深いお話と素敵な演奏をしていただいた横田ご夫妻、合唱指導をしていただいた印東先生に心より感謝いたします。(H.S)

# 秩父独り木 ちちぶひとりぎ

秩父の山々を歩いていつも感心するのは、林床がとて美しいことである。ことに美しく感じるのは、雁坂峠から水晶山に向かう道筋である。淡い緑の苔が山肌一面を覆い、道行く人を魅了する。実に美しく浄土を感じるのには私だけであろうか。

また、秩父の山には、独り木のブナやミズナラなどの巨木が所々にあることに気付く。これは先人達が生活の糧としたこの地の樹木のなかで、最も大きな木に畏敬の念を抱き切り倒すことなく残したものか、はたまた、この地に多くのブナやミズナラが自生していたことを後世に伝えるため残したものかは計り知れない。

私は山で独り木に出会うと木肌に手や頬を触れ、脈々とした悠久の温もりをいただき、心安らぐのである。

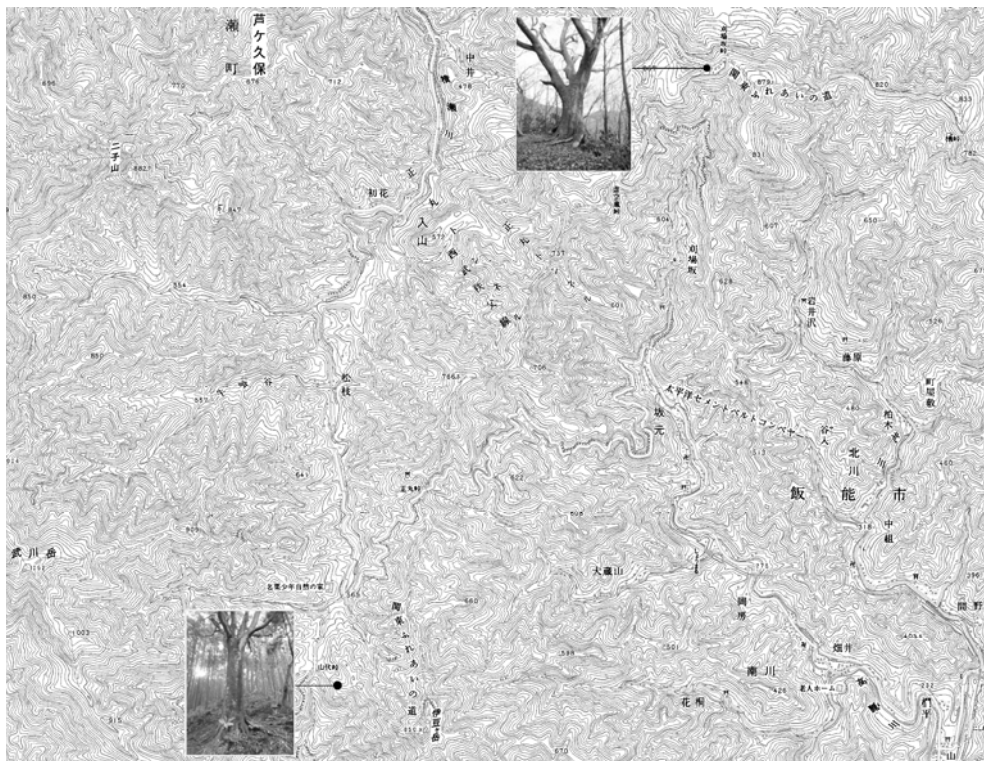
今回、紹介するのは、刈場坂峠から虚空蔵峠・旧正丸峠を経て伊豆ヶ岳・武川岳に向かう関東ふれあいの道に、数百年の時を経て今に至るブナである。

まず、刈場坂峠から虚空蔵峠に向かい10分も歩いて行くと、国道299号が見える尾根に出る。杉が植林された標高820mの地に1本のブナがある。目通

り三尺、根はしっかり地面を捉え、逆三角形の体躯に筋骨隆々とした枝を四方に張り出し、数百年の時を風雪に耐え眼下を見据える姿は、まさに山門に立つ仁王像そのものである。実に生氣に満ちた威厳あるブナといえよう。

ここから旧正丸峠、川越山、正丸山を通り約2時間で標高821mの伊豆ヶ岳山頂に達する。この間にはイタヤカエデやミネバリなどが生育している。伊豆ヶ岳を一気に下ると、標高621mの山伏峠にでる。ここは主要地方道青梅秩父線と伊豆ヶ岳・武川岳に通じるハイキングコースとが交差する場所である。東に行けば伊豆ヶ岳、西に進めば武川岳へと通じる。

伊豆ヶ岳方向へ少し登った所に白木の鳥居がある。一礼し鳥居をくぐると正面に小さな祠が鎮座している。その左手に御神木であろうか、ふっくらした幹を苔で上品にまとい、背丈の高い気品あるブナが密やかに立っている。目通り3尺は優に超すであろう、枝張りはヒノキに囲まれていたせいもおとなしい。太陽の光を手を採るかのごとく細い枝を天に向け、白い二の腕をのぞかせる姿は、子供を慈しみ見守る慈母観音像を思わせる。  
(K.I)



2010 年活動報告			
<p>2009 年 12 月 26 日新たな NPO 法人設立準備会発足以降、NPO 法人化に向けた活動を重ね、8 月 17 日承認に至った。森林の活用による山村地域の活性化をテーマに、都市と山村との連携、環境教育支援活動、地域活性化のためのビジネスモデル形成の 4 つの事業を中心に活動を進めてきたが、NPO 法人化を受けて、森林整備事業では、山吹沢県有林の整備に関して埼玉県との間で 12 月 1 日協定を締結し、今後の活動の基盤を確立することができた。また、平成 22 年度過疎地域等自立活性化推進交付金事業（総務省、以下「過疎対策事業」）において全面的な支援活動にかかわり、新たな森林資源としてのカエデ樹液や蜂蜜などを活かしたビジネスモデルの開発にたずさわることもできた。環境教育支援活動では、ふたば幼稚園の森づくり（幼児）、夏休み親子森林教室（小学生）「森を語ろう」（中学生）など子どもたちの発達段階に合わせたプログラムを企画し、秩父の森林をテーマに取り組んできた。主な活動は、下表の通りである。</p>			
月	森林整備・地域活性化	都市と山村との連携(エコツアー)	環境教育支援
8 月	8.27 県有林山吹沢シカ柵施工下見 過疎地域等自立活性化推進交付金事業支援（以下「過疎対策事業」）		8.7-8 第 2 回親子森林教室（秩父市大滝大久保地区）開催
9 月	9.26 山吹沢巡視 過疎対策事業支援		
10 月	10.30 植林台風接近により中止 過疎対策事業支援		10.20 ふたば幼稚園の森づくり協定書調印（秩父市役所） 10.17 ふたばの森準備作業 10.23 ふたば幼稚園の森づくり植林 10.24 第 2 回「森を語ろう」（秩父一中）
11 月	11.3 県有林山吹沢植林（カエデなど） 11.6 大持山ブナ林調査/横瀬町森林調査 11.21 中津川苗畑整備・イタヤカエデ山採苗 300 本植付け 過疎対策事業支援	11.21 第 1 回秋のエコツアー（金蔵沢大カツラ）	
12 月	12.1 埼玉県有林整備協定書締結 12.8 山吹沢巡視 過疎対策事業支援		12.26 カエデミニ講演会（講師：指村奈穂子氏「カエデの魅力 - おもしろさとむずかしさ」）
1 月	1.9 第 35 回ミツバチ研究会（玉川大学）参加 過疎対策事業支援		
2 月	2.27 秩父市交付金事業成果報告会・シンポジウム開催支援 過疎対策事業支援	2.13・19・20 エコツアー実施 「秩父カエデの森を活かすエコツアーモニターリング」（秩父市交付金事業支援）	
3 月	過疎対策事業支援		

2011 年度活動計画			
月	森林整備/地域活性化	山街交流促進/エコツアー	環境教育支援
4 月	4.17 県有林山吹沢植林		
5 月			
6 月	6.5 苗畑整備 6.26 県有林山吹沢下刈り		
7 月	7.23 秩父市有林下刈り 森林調査・苗畑整備		7.23 「ふたば幼稚園の森」下刈り
8 月	森林調査		8.20-21 第 3 回夏休み親子森林教室
9 月	9.22-26 新宿高島屋「大学は美味しい！」フェア参加 森林調査・苗畑整備		
10 月	10.1「広葉樹ルネサンスで、むら・まちを活かす」シンポジウム参加 森林調査・苗畑整備	10.23 第 2 回秋のエコツアー（紅葉のブナ林を歩く）	
11 月	11.6 県有林山吹沢植林イベント 森林調査・苗畑整備	11.6 山吹沢植林体験エコツアー	11.5「ふたば幼稚園の森」植林
12 月			
1 月	カエデ樹液採取支援		
2 月	カエデ樹液採取支援	2.11-19 早春の森と和メープルを楽しむエコツアー	
3 月	カエデ樹液採取支援		

## 早春を告げる花



マンサク (満作 / マンサク科)



カツラ (桂 / カツラ科、花は雄花)



キブシ (木五倍子 / キブシ科)



アブラチャン (油漉青 / クスノキ科)

## カエデ科の花たち



イタヤカエデ (板屋楓)



新緑のように木をおおう  
イタヤカエデの花



イロハモミジ (いろは紅葉)



ウリカエデ (瓜楓)



ハウチワカエデ (羽団扇楓)



ホソカエデ (細枝楓)



ヒトツバカエデ (一葉楓)



チドリノキ (山柴楓)

## 初夏を飾る白い花



ウツギ (空木 / アジサイ科)



アオグモ (青栲 / モクセイ科)



ズミ (楠 / バラ科)



サワフタギ (沢蓋木 / ハイノキ科)



特定非営利活動法人

秩父百年の森